

公共性の成立と言語

18世紀ドイツの＜言語協会＞

渡 邊 直 樹

はじめに

ハーバマースは、公共性（Öffentlichkeit）あるいは公共圏の成立過程をヨーロッパ18世紀の市民社会の勃興に追究した。そして、「市民」公衆の力の台頭が「公共性」という空間と概念の成立とを促し、社会構造上の変化を招来し、政治・経済・思想・哲学・科学等の分野において理論的実際の価値観の転換をもたらしたと見た。

一方、市民公衆が台頭した社会の展開とともに一つのあらたな方向が生まれる。このことは、何よりも多様な公衆による重層的「公共」の空間と概念とが重きをもつに至ったことによる。その際、言語を媒介とする公衆のコミュニケーションとその情報伝達機関としての新聞・雑誌が大きな役割を果たした。こうした社会の構造変化は、専ら王侯貴族ら上流階級にのみ帰属していた文化の享受においても、公衆による消費の時代を迎えることになる。新聞・雑誌が多く発行され、その内容やジャンルについても服装やら旅行やら、演劇やら奢侈品やらへと広がるとともにその伝達手段であった言語についても、上流階級の社交上の言語であったフランス語からそれぞれの母国語へと広がりをもった。たとえば、イギリス・ロンドンやフランス・パリのファッションがドイツ諸領邦や北欧を経由してロシアにまで伝播するという空間的広がりをもったばかりでなく、自国の文化や言語への関心という歴史的・時間的・空間への深化を促す切掛ともなった。

ところで、コミュニケーション手段としての言語は、学術語としてのラテン語や一般書物

のフランス語から母語による出版物の普及へと、少なくとも文化消費に関するジャンルにおいて時間的・空間的領域を拡大していった。

本稿では、18世紀ドイツの公共性の成立とコミュニケーション手段としての言語との関連に注目することにより、現代社会の多文化主義あるいは多文化共生の課題の根源の一つを明らかにしようと試みるものである。

＜ドイツ語協会＞

1685年の「ナントの勅令」の廃止により、数十万人のフランス人プロテスタント、すなわちユグノーがドイツに亡命した。このことにより、ドイツにはいわばフランス人コミュニティが誕生した。彼らはプロテスタント特有の進取の精神、勤勉、道徳的厳格、誠実さをもってドイツ社会に、いわば異質な社会を形成したのである。ユグノーたちは、信仰心に基づく生活規範を守ったのみならず、フランスの風俗習慣をも堅持し集団で住まいした。わけても積極的にユグノーを受け入れたプロイセン・ベルリンにおいてはほぼ三人に一人がフランス人であった¹。

ユグノーのせいではなかったが、ドイツ上流社会ではフランス風やフランス趣味がすべてにおいて支配していた。プロイセンの啓蒙的専制君主フリードリヒ二世（Friedrich der zweite, 1721-86）の統治の指南役であったヴォルテール（Voltaire, 1694-1778）は、ポツダムのサンサーシ宮殿から手紙を書いている。

1 マックス・フォン・バーン『ドイツ18世紀の文化と社会』（飯塚信雄他訳）1984年。（三修社）4頁。

ここはフランスです。みんなわがフランス語しかしゃべりません。ドイツ語は兵士と馬のためにあるだけです²。

一方、フランスかぶれのフリードリヒ二世はゴットシェト (Johann Christoph Gottsched, 1668-1737) に平然と次のように告白する有様であった。

わたしは若いときからドイツ語の本は一冊も読まなかった。わたしが話すドイツ語は馭者なみで、46歳になった今ドイツ語を話すゆとりはとてもない³。

哲学者 ライブニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) は、意識的にドイツ人であろうとしたが、学術書はラテン語で書き、一般の著述にはフランス語を使った。ドイツ人市民公衆が教養を得るためのドイツ語による書物はそもそも存在しなかったのである。

演劇の構想力や小説の創作力の貧困によって文学作品も生み出せずフランスやイタリアの外国ものの模倣に終始していたドイツの趣味にあって、標準ドイツ語の確立と富裕化とを目指し母国語に目を向け、表現力を向上させ創造的精神を豊かにしたいと願ったドイツの精神を有する指導者たちによりドイツ各地に＜ドイツ語学習協会＞が創設された。たいていこれら指導者は支配者層に属する貴族ではあった。しかし、この＜協会＞を実質的に担ったのは、借り物のフランス語やフランス趣味を理解も享受もできなかった、いわば市民公衆であり、彼らはドイツの過去の価値ある文化的財産を発掘し、その伝統の上に新たな文化を構築しようと企てた。つまり、ドイツの文化遺産を継承し豊かにするための担い手となったのは、この＜協

会＞に属した、王侯ではない市民公衆であった。

1775年マンハイムにもシュテファン・フォン・シュテンゲル (Stefan von Stengel,) 男爵によって＜ドイツ語協会＞が設立された。男爵は、その意義をこう述べている。

王宮でも貴族の間でも、また教養ある振る舞いを身に着けようとした人みんなフランス語が唯一の慣用語であった。……イエズス会の学校では母国語の授業は行われることはなかった。科学アカデミーの著作物さえ、たいていラテン語かフランス語で書かれ、ラテン語がアカデミーの本来の公用語であった。……

この協会は、洗練された趣味の普及、方言の規制を主目的とし、言語に対する特別の配慮をもち、正書法を是正し、会員諸氏の間で統一をはかること、会員は一致協力して不必要なすべての外来語を会員の著作物の中で使用しないように努めること。…… 会員をあらゆる階層から受け入れ、これら階層を通じてすべての身分階級、とくに地方議会および司法諸機関にそれだけ多くの影響を与えることができるように、と考えた⁴。

ここには、18世紀後半に至ってなおフランス語を慣用語としていたドイツ支配階級と母国語において思索する材料をもたないドイツ学術界の状況およびその対抗手段としてのドイツ語の改革の必要性が、つまり外来語の排除と正書法の確立、公用語としてのドイツ語使用が＜ドイツ語協会＞設立の目的であることが説かれている。そして、会員数が20名であり、身分差別をしないこと、洗練された趣味の普及と公序

2 マックス・フォン・ペーン、前掲書、6頁。

3 同書7頁。

4 同書18-19頁。

良俗に違背する著作物の排除、行政機関への対応などが考慮されている。このことは、会員構成が王侯貴族ばかりではなく、市民公衆が参加していること、むしろ市民公衆の力を尊重する姿勢を明示している。

<ドイツ語協会>の設置が多くのドイツの都市で進んだ結果、ドイツ語はフランス語にかわる地位を獲得することができた。16世紀にドイツで出版された書籍の70%がラテン語であったが、たとえば1714年では、ドイツ語による書籍はラテン語の二倍になった。もちろん、書籍の内訳は多様であったがドイツ語による教養書が増加傾向にあったことがわかる。そして、1730年にはラテン語の書籍が30%に、さらに1755年になると5%にまで減少している⁵。

1740年前後の書籍市場は神学、法学、一般教養書も知識人階層をターゲットとし、これらカタログ記載タイトルの28%はラテン語が占めていた。しかし、これらの分野が1770年以降、芸術、自然科学、実践的学問へ移行するとともに、ラテン語書籍の割合は14%に減少している。そして、出版された書物の86%がドイツ語によるものになった。さらに1800年になると、ラテン語は全体の4%でしかなくなる⁶。

専門分野	タイトル数			新刊総数において占める割合(%)		
	1740	1770	1800	1740	1770	1800
神学	291	280	348	38.5	24.5	13.6
法学	97	61	129	12.9	5.3	5.0
歴史・地理	85	110	272	11.3	9.6	10.6
医学	50	91	209	6.6	8.0	8.1
哲学	44	34	94	5.8	3.0	3.7
芸術および語学間	44	188	551	5.8	16.4	21.5
一般教養	40	52	37	5.3	4.5	1.4
通俗的修養書	25	39	119	3.3	3.4	4.6
数学・自然科学	25	71	183	3.3	6.2	7.1
古典文献学	18	35	78	2.4	3.1	3.0
国家学・政治学	10	32	93	1.3	2.8	3.6
農業・産業、その他	8	60	221	1.1	5.2	8.6
実用書、ハンドブック	7	16	53	0.9	1.4	2.1
文献学(古典を除く)	5	16	28	0.7	1.4	1.1
教育	4	20	105	0.5	1.8	4.1
通俗的定期刊行物	2	39	49	0.3	3.4	1.9
総数	755	1,144	2,569	100	100	100

(専門分野ごとの新刊書数 1400-1800年⁷)

ドイツ社会全体の文化状況が豊かになったことは、<ドイツ語協会>がドイツ各地に多く設立されたことが示すばかりではない。ドイツ諸領邦が「科学アカデミー」設立により学術の振興を図ったこと、さらに「フリーメーソン」の団体や、とりわけ「読書協会」、社会改革や教養を目的とした市民や貴族などの身分階級とは無関係の会員から構成される団体・組織が多く誕生したことが、このことに与って大きな力となった。

これら諸団体は18世紀初めにはほぼゼロに近かったが、1795年には160にも達している。ドイツ書の普及と団体・組織の数において、18世紀には少なくともフランスと同等の知的水準に到達したと見てよい。(グラフ参照)

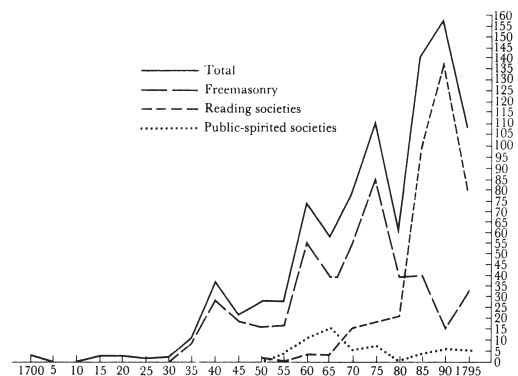


Figure 1.1 The development of societies, clubs and organizations in the eighteenth century in order of dates

(年代順による18世紀の協会、クラブ、組織の発展⁸)

1780年にフランス語で『ドイツ文学について』(De la littérature allemande)を執筆し、文籍に通じた文人でもあることを欲したフリードリヒ二世はついにこう述べるに至る。

わが国にも古典的作家が登場することであろう。……われわれの隣国の人々はドイツ語を学び、王侯貴族たちも喜んでドイツ語を話すであろう。洗練され完成されたわ

5 ベーン、前掲書20頁。

6 ミヒャエル・ノルト『人生の愉楽と幸福』(山之内克子訳)東京 2013年、16頁。

7 同書。

8 Richard van Dülmen: *The Society of the Enlightenment. The Rise of the Middle Class and Enlightenment Culture in Germany*, England 1992, S.10.

が言語が、われわれのすぐれた著述家たちの力でヨーロッパの隅々まで広がることになる⁹。

事実、大王はプロイセンの公文書をドイツ語で起草させた。フリードリヒ二世のドイツ語とドイツ文化に対する認識の転換を促したものは、確かに、一般に官製の＜ドイツ語協会＞の創設が発端であったにせよ、市民公衆の文化享受への欲求が母語ドイツ語・ドイツ文化の再生と創造の運動へと展開し、コミュニケーションを促すメディアやある種目的を共有する市民公衆からなる団体・組織が社会構成員の境界を取り払ったことが大きい。

18世紀のドイツが中央集権的統一国家として存在していなかったことが、むしろ多くの協会や団体が存在することを可能にしていた。ドイツ語圏諸領邦の間の国境は低く、いわばトランスナショナルで市民公衆の共通の趣向がむしろ多様かつ容易に拡大した。これら多様な諸団体の活動が公共性という思想の醸成に与って力があつた。そして、理性が法と市民生活の基準となり、公衆の自由な創造的知性の展開を促してくれるかのように見えた。

国家と協会

国家を君主の個人財産とみなす絶対主義の時代に、プフェンドルフ（Samuel von Puffendorf, 1632-1694）は自然法について体系化し、法は絶対的妥当性を有し、神さえ影響力をもたない合理的公理から導き出されたものであること、そして、人間の能力は出自によるものではなく、個人に生来等しく備わっている理性の展開により獲得できるものであることを宣言した。したがって、理性が法を支配することによって、王侯貴族の特権は不当となり、国家の

支配者は万人の幸福を実現することを義務とし、そのためには被支配者との間に契約が結ばなければならない、という論理を正当なものとした。

しかし、形骸化した神聖ローマ帝国ドイツにおいては国家統一の理想も目指す目的も明確ではなかった。政治的領域では、相変わらず君主と公衆、あるいは専制政治と自由との相互関係の原則を議論する機会はなかった。現実的依りどころを欠いているがゆえ、公衆の意志が結集できる目標がなかった。漠然たる公衆の愛国心の表明の場であつた＜ドイツ語協会＞は結果として愛国的衝動として終わってしまう。ドイツ的感情を有する詩人は、その愛国的感情の根源を10世紀半ば頃に誕生した宗教叙事詩『ヘーリアント』（Heliand）や13世紀初めに誕生したといわれる『ニーベルンゲンの歌』（Nibelungenlied）に求めなければならなかった。

ゲーテ（Johann Wolfgang Goethe, 1753-1832）は、自伝『詩と真実』（Dichtung und Wahrheit, 1828）のなかで「最初の、真実の本来の生活はフリードリヒ大王と7年戦争の体験とにより、翌年ドイツの文芸に入ってきた¹⁰」と書いたが、その愛国的感情は市民公衆の精神に入り込んできたとしてもいまだ意識化されることはなく、そのドイツの愛国心は個人にとどまり国民感情との連帯が形成されるには至らなかった。国家の存在意識の乏しさは、その反動として個人の内面的心情へ大きな力を与えることになったものの、政治的社会的力を欠くことになった。詩文学が人間の思惟と感覚とを満足させ、行動へ向かう意志と力とを封印してしまったのである。理性は感情にその地位を譲った。

そして、啓蒙主義は本来王侯貴族支配に敵

10 Goethes *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hrsg. v. Karl Richter. Zusammenarbeit mit Herbert G. Göfert, Norbert Miller und Gerhard Sauder, München 1986. Bd. 16, S. 303.

9 ベーン、前掲書20頁。

対する市民の側からの権利要求を含んでいたが、その要求は狭い市民公衆の社会のなかに閉じ込められ、むしろ社会規範として個人の道徳的価値を規定していった。市民公衆という概念は後退し、美德と感情とが入り混じった人間性に惑溺していく。ゲラート（Christian Fürchtegott Gellert, 1715-1769）が寓話で表現した純粋な内的感情やクロプシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock, 1724-1803）が『救世主』（Messias, 1748）で謳いあげた宗教的感情、ゲルマン的神話世界や自然賛美がこの方向を推し進めた。ドイツの場合、啓蒙主義はイギリスやフランスと異なり、人間感情と宗教的純化に力をもったが、このことはむしろ公共という観念が創造されなかったドイツ的国家形態によるのである¹¹。

カント（Immanuel Kant, 1724-1804）による市民社会の概念では、道徳は実体験とは別の理性により導かれる。そして、道徳の自律性が自由の基盤としての歴史的条件を克服可能にする。悟性を働かせる啓蒙により、人間は未熟から大人へと成熟するが、その際、他人の指導を必要とする。公共性は、学者の世界内部においてのみ実現できるのではなく、人々が理性を公共的に使用するなかで実現される。換言すれば、公衆の啓蒙とは「人間理性の公的使用の自由」により達成される。

一方、「理性の私的使用とは、委任された市民的役目や職務において行う理性の使用のこと¹²」であり、「市民」とは個人の自律性を尊重し、行動規範や法の尊重、暴力の制御が必要である。つまり、公共の美德が要求される。

ハーバマスは18世紀ヨーロッパ社会を念頭に「市民社会」の内実をこう定義している。

その制度的中核は、生活世界を構成する社会のなかの公共圏のコミュニケーション構造をつなぐ非政治的・非経済的連合体や自発的結社によって構成されている。市民社会は多かれ少なかれこうした自発的に発生するさまざまな結社や組織や運動によって構成されており、これらは社会的諸問題がどのように私的な生活領域に反響するかを調整し、その反応を純化し拡大して公共圏に伝達する。市民社会の中核は結社のネットワークで構成されており、それは組織化された公共圏の内部において問題解決を目指す一般的利益を含んだ諸言説を制度化していく。これらの「言説を軸にした構想」は、組織の平等主義的かつ開放的な形態を持ち合わせており、この形態はこれらの構想が結晶し、連続性と永遠性を与えるコミュニケーションの本質的特徴を映し出す¹³。

つまり、コミュニケーションが保証される空間と時間とは、自由と平等が前提されて初めて成立し、課題解決への道筋を示すことができるのである。換言すれば、私的自由の制限が前提されるのである。

フリードリヒ二世は1784年勅令を出す。ここには公権力に対する公共性からの批判への警戒と、一方、その公衆の正当性の証しとが同時に見てとれる。

私人は君主や宮廷や、その官吏、閣僚、法定動向、手続き、法律、措置、指令などについて公然と判断したり、非難したり、これらの入手報告を告知したり、印刷により知らしめる資格はない。私人には事

11 拙著『レッシング-啓蒙精神の文芸と批評-』東京 2002年、11-13頁。

12 ハーバマス、147頁。

13 メアリー・カルドー『グローバル市民社会論 戦争へのひとつの回答』（山本他訳）東京 2007年、31-32頁。

態や事由について完全な知識が欠けているから、彼らはこれを批判する資格もないのである¹⁴。

グリムのドイツ語辞典は18世紀に「公衆」(Publicum)の語がベルリンで市民権を得たことを記している。

ヘーゲルは、カントの先験的存在であるところの理性の概念を批判し、理性は経験であるという。この意味で、ヘーゲルは市民社会を「家族と国家とは異なる、その中間の領域¹⁵」と定義した。そうであるとすれば18世紀ヨーロッパの市民社会の多様な協会の展開は大きな空間を占めることになる。フランス革命のリベラル派であり、18世紀ヨーロッパ世界ではなく、新興国アメリカ合衆国に民主主義の基盤を追究し、「代議制統治論」に賛同していたトクヴィル(de Tocqueville,1805-59)は、その市民社会における結社の広がり注目し、結社が自由と平等の前提条件であり、そこで必要とされるのは公共のコミュニケーションであり、分別・道徳である¹⁶と述べている。ドイツにおいて自由と平等を追究した結社が、大きな力となり得なかった理由は、その領邦という小国家の狭隘な限定的世界であったため、コミュニケーションが保証されるべき公論と公共性が成立する空間があまりに小さすぎたからである。

ところで、啓蒙主義者レッシング(Gotthold Ephraim Lessing,1729-91)は、いわばジャーナリストの先駆として生涯文筆を唯一生計の糧とした。レッシングは古典的教養や神学研究を学術的蓄えとし、透徹した洞察力をもって時代精神を代表する著作家(Schriftsteller)となった。

真理を追究する姿勢において、彼は舌鋒鋭い批評家であり、演劇、芸術、言語、神学、考古学、美学等あらゆる分野を涉猟して得た知識によって、いかなる権威にも屈することはなかった。つまり、公共の意見の代弁者であった。「フォス新聞」(Vossische Zeitung)文芸欄の編集者となり、ニコライ(Friedrich Nicolai,1733-1811)と批評誌「最新文学書簡」(Briefe, die neueste Literatur betreffend)を発刊し、ハンブルク国民劇場の劇評家となる。

レッシングの主張は徹頭徹尾、公衆相手にコミュニケーションの可能性を追究したものであったが、それは社会性をもった。ハンブルク劇場の批評集である『ハンブルク演劇論』は、劇と観客であるところの公衆との接点において成立し得た劇理論として評価を獲得した。

ゲッツェ(Johann Melchior Goeze,1717-1786)との神学論争は宗教と神学の領域、いわばコミュニティを超える検閲という国家の法的拘束力によって制限されるほど、それほど発信力をもった。私的公共圏から専ら政治的公共圏へと展開することになったレッシングの活動が、フリードリヒ二世やブラウンシュヴァイク公(Karl Wilhelm von Ferdinand, Herzog von Braunschweig,1713-1783)の怒りをかったが、このことはレッシングが批評家であったためというばかりではない。レッシングは公共の美德と私的自由とが一体化したところ、つまり自由な作家という立場にあって、公共の課題を市民公衆のものとする可能性を秘めていたからである。

学生時代に暴力から身を護るため警護団を結成したこともあり、後にゲッティンゲン大学教授となったシュレーツァー(August Ludwig von Schlözer,1735-1809)は「書簡」や「国家新報」(Staatsanzeiger)を発刊し、当時の腐敗政治を批判し、公論を国家の実効支配への公共的コントロール機能とみなした。検閲制度はゲッティンゲンでは機能しなかった。シュレー

14 ハーバマス『公共性の構造転換』(細谷・山田訳)2006年 37頁。

15 ヘーゲル『法の哲学 自然法と国家学の要綱』(上下)、『ヘーゲル全集』第9巻、岩波書店、2000-2001年)

16 メアリー・カルドー、前掲書、43頁。

ツァーは、領邦君主の専制や貴族の腐敗、僧侶の不寛容を告発し、市民的自由の価値を説き、出版の自由や検閲の不当性を訴えた。これら新聞が政治的指導者たちを恐れさせた事実は、市民社会の公論が公共的力を持ち始めたことを示している。発行部数は4400程度に過ぎなかったが、その稿料は「ゲーテとコツェブー（August von Kotzebue, 1761-1819）を除くと、ドイツの著作家がめったに受け取ったことがない¹⁷」ほどの金額であった。

理性に基づくフランス革命の人権概念を歓迎したヴィーラント（Christoph Martin Wieland, 1733-1813）も月刊誌「ドイツ・メルクル」（*Teutscher Merkur*）において政治情勢を報告することを義務とした。

文芸的公共性

サロンとかクラブとか協会とかにおける議論は、文化消費を促し文芸的公共性を発展させるが、もともと文芸的公共性は非政治的であり、公共的コミュニケーションの形成というよりも私的意志疎通の手段に過ぎないものであった。「読書協会」と文芸雑誌の共鳴板となって以来の文芸的公共圏は、しかしながら私的領域から公共的領域へと、王侯貴族の支配から社会を構成する個人と共同体の力関係に変化を生じさせ、両者の力の相対化が進んだことを意味する。近代の市民社会の誕生は階級的社会の秩序体系が崩壊し、個人の自律と平等の意識に基づくものであるが、公共の美徳が強調され、私的自由を欠いていた。私的自由は公共の美徳と全き自由とが均衡したところに成立する。

しかし、このところから国家と社会の分離が発生する。換言すれば、公共の美徳が公共的領域に浸透するにつれて社会が国家化される。それと同時に国家が社会化され、自由な文芸的

公共圏の自律性が失われるか、あるいは公共性はほとんど形骸化し読書文化はイデオロギーと化してしまう。19世紀の綱領的文芸誌は、文化的関心を有する市民層の離反を招く。文芸的雑誌、特に家庭的空間に場を占めたそれは市民生活の変化とともに時代遅れとなる。18世紀に読書クラブとならんで役割をはたしてきた市民の「サロン」も同様の変化を経験し時代遅れとなってしまう。かつて文化的公共的コミュニケーションの基盤であった家庭で行われた読書は解消され、議論へ展開する可能性も必要性もなくなった。

公共性と私生活圏の関係性は文芸を介して公衆と一体化できる主観性を醸成できたが、結局のところ、その主観性は私的自律を妨げるものとなった。公共性はともすれば私的経歴の暴露となって国家権力への批判的論議を主観的に制約する方向へと進んでしまった。市民的教養層と知識階層との乖離が生まれ、芸術家や作家たちの間の親密な関係は崩壊し、文化を供給する側が、社会的に権力の側に統合され、一方文化を消費する側は脱政治的公共性の側に退き、公衆としてコミュニケーション形態を失う。

文芸的公共性と、つまり文化を議論する公衆から文化を消費する公衆であるところの政治的公共性とを区別していた垣根は崩壊し、文芸的公共性を構成していた家庭の親密性は媒介手段の多様化と拡張により大衆化へと席を譲ることになった。

18世紀の市民社会の誕生は公共的コミュニケーションの空間を成立させたものの、内部に多様なコミュニケーション空間を包括していたため、それは利害の調整のうちに埋没し、最終的には国家の枠組みのなかに再度吸収されてしまう。

むすび

グローバル化は人間の移動の自由を否応なし

17 ベーン、前掲書100頁。

に促すことになった。その原因がポジティブであれ、ネガティブであれ、この結果は移動先での「共同体」の形成と、この「共同体」を受け入れる社会の「共生」の在りかたと方法を改めて問うものとなっている。

共生の理念は民族とか宗教とかを基盤とする共同体あるいは団体と一致することが可能なのであろうか。

公共性とは人間個人の自由であるところの人權の保障の獲得を基本目的としたものであるとすれば、それは公共的空間の存在と相互のコミュニケーションにより達成されるものであった。しかしながら、その目的達成のための努力は共同体の力に依存し、多様な共同体の存在がその内部において利害の調整に腐心することとなり、公共性の理念は私的自律との対立により、むしろ公共性の議論を後退させた。

民族的宗教的共同体が、公共性のためのコミュニケーションを閉ざしている現状は、共生が声高に叫ばれる中で、ハーバマースのいう「公共性の構造転換」を「共同体」と共生の観点から、改めて有意義な研究対象として蘇らせてくれる。